津軽広域連合だより
tsugarukoikirengo DAYORI
平成22年3月 Vol.31

広域人材育成セミナー開催

広域的な視点を持ち、地域間・分野間を越えて連携しながら、地域独自の資源や魅力を掘り起こし地域活性化を行う人材を育成することを目的として、平成21年12月19日（土）ベストウェスタンホテルニューシティ弘前において広域人材育成セミナーを開催しました。

セミナーでは、農林水産省大臣官房政策課企画官・地域活性学会理事木村俊昭氏を講師に迎え、「地域活性化の動向～農商工連携等の事例を交えて～」と題し基調講演が行われ、木村氏は全国各地のまちづくりの具体例などを挙げながら「地域活性化のためには全体の最適化が重要である」と熱く語りました。その後、木村氏をアドバイザーとして、青森県観光連盟の九戸眞樹専務理事のコーディネートによりパネルディスカッションが行われ、パネリストとして参加した弘前大学教育学部の北原啓司教授、財団法人板柳町産業振興公社りんごワーク研究所の鈴木清孝所長、NPO 法人岩木山自然学校の髙田敏幸代表、「清水森ナンバ」ブランド確立研究会の中田嘉博氏が意見を交わしました。

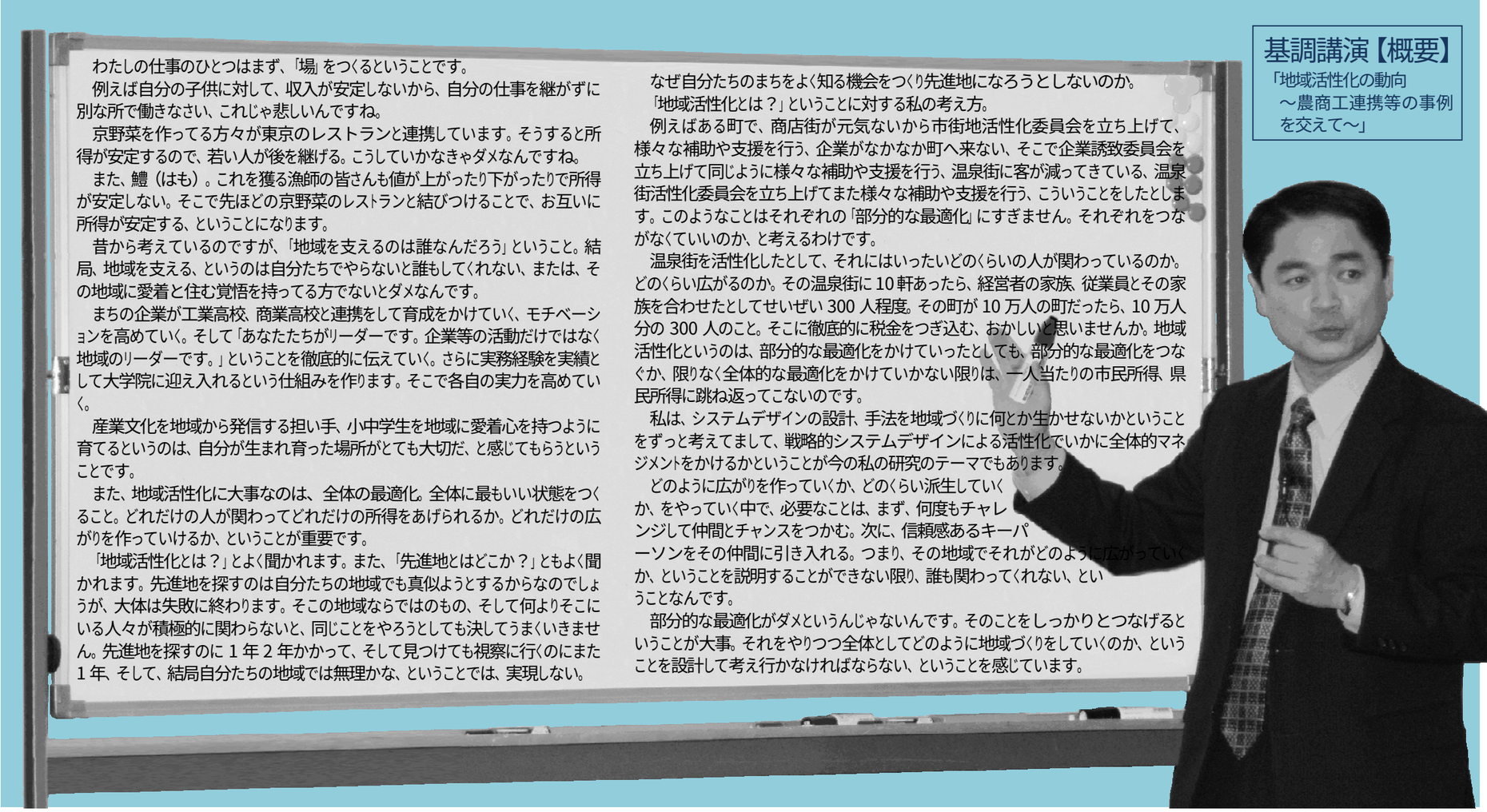
最後にコーディネーターの九戸氏から参加者に対し「自分が実践者になるんだという気持ちでがんばっていただきたい」との声が掛けられ、セミナーは終了となりました。

基調講演・パネルディスカションの概要は次のページ

木村俊昭　昭和35年北海道生まれ。小樽市入庁後、企画政策室主幹などを歴任し、歴史的建造物を活用した全国初のライトアップ、東京から老舗（にせ）ガラス工房を誘致して「ガラスの街・小樽」としてのブランド化などに成功。こうした街おこしの手腕を買われ、平成18年に内閣官房内閣府、平成21年からは農林水産省（出向となり、地域と大学との連携）などを担当。**NHK番組「プロフェッショナル仕事の流儀」**をはじめ数々のテレビ番組にも出演。全国各地（講演や現地指導に飛び回っている。

基調講演【概要】

「地域活性化の動向
～農商工連携等の事例を交えて～」



わたしの仕事のひとつはまず、「場」をつくるということです。

例えば自分の子供に対して、収入が安定しないから、自分の仕事を継がずに別な所で働きなさい、これじゃ悲しいんですね。

京野菜を作ってる方々が東京のレストランと連携しています。そうすると所得が安定するので、若い人が後を継げる。こうしていかなきゃダメなんですね。

また、鱧（はも）。これを獲る漁師の皆さんも値が上がったり下がったりで所得が安定しない。そこで先ほどの京野菜のレストランと結びつけることで、お互いに所得が安定する、ということになります。

昔から考えているのですが、「地域を支えるのは誰なんだろう」ということ。結局、地域を支える、というのは自分たちでやらないと誰もしてくれない、または、その地域に愛着と住む覚悟を持ってる方でないとダメなんです。

まちの企業が工業高校、商業高校と連携をして育成をかけていく、モチベーションを高めていく。そして「あなたたちがリーダーです。企業等の活動だけではなく地域のリーダーです。」ということを徹底的に伝えていく。さらに実務経験を実績として大学院に迎え入れるという仕組みを作ります。そこで各自の実力を高めていく。

産業文化を地域から発信する担い手、小中学生を地域に愛着心を持つように育てるというのは、自分が生まれ育った場所がとても大切だ、と感じてもらうということです。

また、地域活性化に大事なのは、全体の最適化。全体に最もいい状態をつくること。どれだけの人が関わってどれだけの所得をあげられるか。どれだけの広がりを作っていけるか、ということが重要です。

「地域活性化とは？」とよく聞かれます。また、「先進地とはどこか？」ともよく聞かれます。先進地を探すのは自分たちの地域でも真似ようとするからなのでしょうが、大体は失敗に終わります。そこの地域ならではのもの、そして何よりそこにいる人々が積極的に関わらないと、同じことをやろうとしても決してうまくいきません。先進地を探すのに１年２年かかって、そして見つけても視察に行くのにまた１年、そして、結局自分たちの地域では無理かな、ということでは、実現しない。

なぜ自分たちのまちをよく知る機会をつくり先進地になろうとしないのか。

「地域活性化とは？」ということに対する私の考え方。

例えばある町で、商店街が元気ないから市街地活性化委員会を立ち上げて、様々な補助や支援を行う、企業がなかなか町へ来ない、そこで企業誘致委員会を立ち上げて同じように様々な補助や支援を行う、温泉街に客が減ってきている、温泉街活性化委員会を立ち上げてまた様々な補助や支援を行う、こういうことをしたとします。このようなことはそれぞれの「部分的な最適化」にすぎません。それぞれをつながなくていいのか、と考えるわけです。

温泉街を活性化したとして、それにはいったいどのくらいの人が関わっているのか。どのくらい広がるのか。その温泉街に10軒あったら、経営者の家族、従業員とその家族を合わせたとしてせいぜい300人程度。その町が10万人の町だったら、10万人分の300人のこと。そこに徹底的に税金をつぎ込む、おかしいと思いませんか。地域活性化というのは、部分的な最適化をかけていったとしても、部分的な最適化をつなぐか、限りなく全体的な最適化をかけていかない限りは、一人当たりの市民所得、県民所得に跳ね返ってこないのです。

私は、システムデザインの設計、手法を地域づくりに何とか生かせないかということをずっと考えてまして、戦略的システムデザインによる活性化でいかに全体的マネジメントをかけるかということが今の私の研究のテーマでもあります。

どのように広がりを作っていくか、どのくらい派生していくか、をやっていく中で、必要なことは、まず、何度もチャレンジして仲間とチャンスをつかむ。次に、信頼感あるキーパーソンをその仲間に引き入れる。つまり、その地域でそれがどのように広がっていくか、ということを説明することができない限り、誰も関わってくれない、ということなんです。

部分的な最適化がダメというんじゃないんです。そのことをしっかりとつなげるということが大事。それをやりつつ全体としてどのように地域づくりをしていくのか、ということを設計して考え行かなければならない、ということを感じています。

パネルディスカッション【概要】

「地域独自の資源・魅力の発掘とその広域的活用による地域活性化」

九戸 眞樹
青森県観光連盟専務理事、元青森県職員（東京事務所長、商工労働部長等を歴任）

九戸（コーディネーター）　本日のパネリストは、全く分野が違っていてもそれぞれが違うアイテムで地域の人たちを元気にしようとしている人たちです。まず、これまでの活動をお話いただきます。

中田　津軽在来種の唐辛子である清水森ナンバは、近年、生産者が激減しておりましたが、それを弘前大学の先生と普及センターの方でもう一度復活させようってことで遺伝子の研究や加工についても研究しています。私は実際に畑で育ててもいます。

高田　私は野外の活動をするのが専門です。白神から下って十三湖（日本海）方面へと移動して白神の種の多様性と地域の一体感を感じられるようなエコツアー、エコツーリズムをやってます。また、“エコミュージアム～地域全体が博物館”って発想で地図をつくったりもしています。いろんな手法を使って、広域的な視点と、自分の住んでいるところ、つまりミクロの視点でどうしたらいいのか、という2つのことを考えて活動しています。最近は内側向けの視点でやっています。

鈴木　私は元々板柳町の職員でした。今から30年弱ほど前に、町の基幹産業であるりんごの価格が低迷した時期があり、町役場の若手職員を集めてプロジェクトが立ち上がりました。様々な調査を重ねているうちに、やはり先人たちが100年以上かけて育ててきたりんごをもっと多方面から見て分析をして進めていくべきだという結論になり、このりんごワーク研究所とそのブランドを立ち上げることになりました。今では、全国の百貨店だけではなく、香港、シンガポール、台湾などにも販路を広げております。

北原 啓司
弘前大学教育学部教授、同学部副学部長、津軽広域懇談会座長

北原　僕は場所という言葉と空間という言葉で違う使い方をしてまして、「空間」っていうのは自分のこだわりや思いで、かけがいのない「場所」になります。町づくりというのは「空間」を「場所」に変えることだと思います。マネジメント、何とかする、育てるという気持ちも必要です。地域の人々、私はこれを「土の人」と呼んでますが、地元の恵まれている部分や優れている部分が、毎日見ているうちに麻痺してわからなくなっていきます。それに対して観光客や県外からの大学生などの外からの人間、「風の人」は、何で？という疑問を投げかけてきます。おもしろい、おかしいということを言ってくれます。こういうひとたちが何かを生み出していく可能性を持っています。何かを地域で見つけることで「思い」が高まってきて、「思い」を込める「場所」を持つことでみんなが元気になっていき、「風の人」の刺激を受け、育てていくことでその地域の次の世代が育っていく、そんなことが必要なのかな、と思っています。

九戸　巻き込むってことが重要なんだと思いますが、木村先生いかがでしょうか。

木村　私は小樽で職人さんたちのものづくり活動ってのに関わってたんですが、お寿司屋さん、ホテル、タクシーの運転手さん、スナックのママ、みんな関係あります。関わると楽しいし、所得が上がります。我々は地域にいながら、なかなか自分の地域のことをよく知らないってことがあります。そこから情報発信、起業、いろんな対話を行い、いろんなことを展開でき、いろんな人が関わっていく。そういうことを考えていくと、関われない人はいないんですよ。

中田 嘉博
「清水森ナンバ」ブランド確立研究会、清水森ナンバ生産者

九戸　人とのつながり、身近にあるものを気付かせてくれた人、それぞれの人の役割、こういうのが大事なのかなって感じました。モノができただけでは商品にはならないでしょうし、それを売れるようなものにするために関わる方も必要でしょう。そこの辺りや、また、外の人との関わりなんかもお話いただけますか。

中田　そもそものとっかかりが（外から来た）弘前大学の教授で、味の特徴や成長の度合いによる辛さの変化なんかを講演されて、それを普及センターの人が聞いて、（今販売をしている）中村さんが聞いてという流れです。ただ、結局所得が上がらない、利益が上がらないと専任ではやれないし、人も雇えるようにもならない。そのあたりの拡大のためにどうするかについては、今スタートしたという感じです。

九戸　高田さんは、最近では内側への活動を重視していらっしゃるとのことですが。

高田 敏幸
NPO 法人岩木山自然学校代表、津軽の名人・達人バンク登録者

高田　災害時の動き方とかを学ぶ機会を作ってますが、実はそれを通じて地域の絆って育ってくれればいいかな、と思ってます。有事の時に、どんなところにどんな人が住んでて、誰が重機を持ってて、誰が無線を持ってる、とか。自然、温泉、人、農業、みんな巻き込んで何かいい方向に向かわないかな、と今活動しているところです。

九戸　鈴木さんと北原さんには、会場のみなさんにこういうところが大事だよ、というような何かエールみたいなものをお願いしたいのですが。

鈴木 清孝
（財）板柳町産業振興公社りんごワーク研究所長

鈴木　当たって砕けろ、わからないことは聞く、ということをやっていけば道は開けるのかなと感じます。確かに我々がやっていたときも、最初はいろいろな反対がありました。うまくいくわけがない、と。でも、やっていくうちにどんどん関わる人が増えてきて、協力もしてくれますし、数年していくうちに逆に生産が追いつかないくらいになりました。みんなの何らかのプラスアルファ、メリットを考えて実践していけば、最後はみんな必ず協力してくれる、ということで事が進む、道は開けるのかな、と思います。

北原　まず「ジェラシー」。これが意外と大事かなと思います。何かをやっていると、外の人間が何かやっていれば、何かやっているということで内の人間も参加したくなります。また、そうやって参加していると今度は別の外の人間が参加したくて参加してきます。また、自分のことを考えることがまず出発点であると思います。「公」というのはまず「私」から始まるんです。「本当の公共」っていうのは、粘り強い「私」っていうのが醸し出すものじゃないかな、って思います。

九戸　木村さん、最後にお願いいたします。

木村　キーワードとしては、地域を中長期的に担う「子供たち」だと思います。それと併せて「自分たちを誇りと思える産業文化をどのように育てていくか」ということ。また、何か情報としてその地域に集中させてまたそこから発信していくことが、自分たちの地域を高めていく。併せて、地域内で重要なのは、人材、ひとなんです。その人材をどのような仕組みで作っていくのか、そこへ関わっていただくのか、ということを合わせて設計・デザインをしていかないと、人が育たない、又は地域から出て行ってしまうという状況も発生します。ですので、そういうことも考えていくことも大切かな、と。特に今、農林水産関係の担当をしてますので、そういうことも含めて何かがあれば、ご協力させていただければ、とも思います。

九戸　力強い言葉をいただきました。ある種の危機感、何とかしなくちゃという気持ち、何とかしましょうというマネジメント、一緒にやろうというモチベーションがあって、初めて地域活性化がスタートしていくんだろうな、と思いました。

九戸　皆さん（来場者）、こういうセミナーの神髄はここからです！今日の話を地域に持ち帰りまして、自分が実践者になるんだという気持ちでがんばってください。

※ここに掲載した概要は、基調講演・パネルディスカッションともに紙面の都合上各人の発言を抜粋したものとなっています。本セミナーの全容については津軽広域連合ホームページにてご確認ください。

絵本の読み聞かせ

津軽の名人・達人バンク講師派遣事業

弘前保育所子育て支援センターにおいて2月24日、名人・達人バンク登録者の千葉仁子さん（登録№75）を講師に迎え、『乳幼児への読み聞かせ』が行われました。

これは、専門家の読み聞かせを母親に実体験してもらうことで、家庭においても子供への正しい読み聞かせができるようにとの狙いから開催されたもので、当日は同センター「子育て広場」を利用している幼児とその保護者ら約20名が参加しました。

読み聞かせはまず「笑うこと」をテーマとして始まりました。幼児期に声を出して笑うことで子供の脳細胞が活性化し、感情豊かに育つと千葉さんから説明がありました。また、運動した後、静かになってから読み聞かせをすると集中力・情緒形成に効果的であるらしく、参加者たちは千葉氏の掛け声に合わせて元気に体を動かし、そのあと大型の絵本による読み聞かせが再開されると、子供たちはその絵本をじっと見つめながら千葉さんの話に聞き入り、物語に強くひかれているようでした。

千葉さんの読み聞かせの方法は、ただ読むのではなく、子供たちとコミュニケーションをとりながら一緒に遊んでいるかのようであり、全体を通して子供も母親もとても楽しんでいる様子でした。

『津軽の名人・達人』は、趣味・芸術・スポーツ・歴史などさまざまな分野で、みなさんの生涯学習や文化活動をサポートしてくれる心強い味方です。講演会・学習会の講師依頼に、PTA・サークル活動の先生などにぜひ当バンクをご活用ください。

また、新たに「名人・達人」になっていただける方を随時募集中です。特別な資格・基準などは設けておりませんので、どしどしご登録ください。　※詳しくはホームページにてご確認ください。

津軽広域連合議会の動き

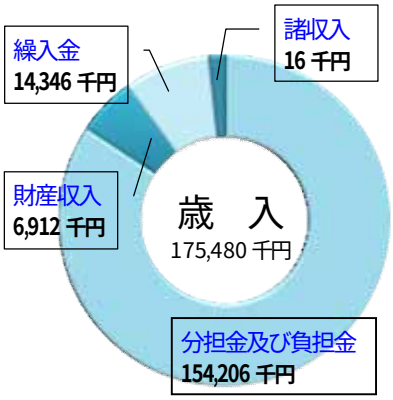
弘前地区環境整備センターにおいて2月17日、平成22年第1回津軽広域連合議会定例会が開催されました。

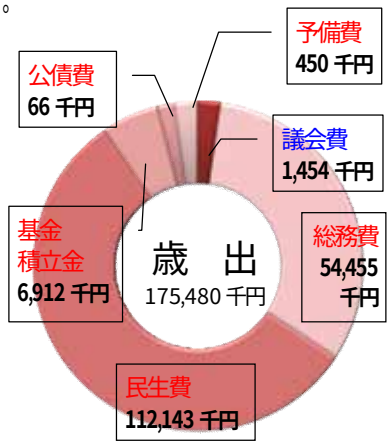
会議では、平成21年度補正予算（第2号）、平成22年度予算のほか、津軽広域活動推進基金条例案、職員給与条例及び勤務時間等条例の一部改正案、津軽広域連合広域計画の一部変更案の以上5件の案件が審議され、全て原案通り可決されました。

平成22年度予算は、総額1億7千548万円で、前年度当初予算に対し294万6千円の 1.7%減となっています。歳入歳出各費目の概要は以下のとおりです。

新議員紹介

大鰐町から新たな津軽広域連合議会議員として渡辺久一郎氏が選出されました。





とっておきの津軽大賞コンテスト入賞作品決定

“ふるさと津軽”の素晴らしさについて相互に理解を深め、人々に伝えていくことを目的として今年度実施した「とっておきの津軽大賞コンテスト」の入賞作品が決定しました。

写真部門に41名から95作品、川柳部門に80名から201作品の応募があり、厳正な審査の結果、写真部門には弘前市の田澤安宣さん（79）の「奇祭『大河原の火流し』」、川柳部門には同市の福士哲郎さん（68）の『津軽万歳　吹く風四季の彩がある』が最優秀賞に輝きました。また、優秀賞各２作品、入選各８作品も選ばれ、入賞者全員に対し賞状と、副賞として商品券と地元特産品の詰め合わせセットが贈呈されています。

入賞した全作品を今号折り込みの特集ページで紹介しておりますので、ぜひご覧ください。また、今年秋頃には関係市町村公共施設等にて入賞作品の巡回展示を行う予定です。

２月２５日に弘前市役所で表彰式が行われ、相馬錨一広域連合長（弘前市長）より、最優秀賞受賞者の田澤さん（写真左）と福士さん（同中央）に賞状と副賞目録が贈呈されました。

津軽広域連合は、弘前市・黒石市・平川市・藤崎町・板柳町・大鰐町・田舎館村・西目屋村の８市町村により、介護認定及び障害程度区分判定審査・各種ソフト事業などの様々な事務事業を共同で実施する **特別地方公共団体**です。

（問い合わせ）０１７２-３９-７２００
〒036-8276
青森県弘前市大字樋の口町 260 番地 4
詳しくはwebで　津軽広域連合　検索